平成22年度「教師力向上」教育実践力継承事業についての報告

久御山町立久御山中学校

1　学校としての取組のまとめ

(1) 研究主題

「耕心」　　知恵を耕し、心を耕す授業づくり
～確かな学力の充実と向上をめざして～

＜研究の目標＞

「すべての教科で言語活動の充実の視点を持った授業の展開を工夫し、学習基盤の確立と確かな学力の充実と向上を図る」

＜取組の概要＞

平成21年度から実施している具体的な取組は次の四点である。

① 授業と家庭学習のリンクの工夫
- 学習習慣の充実
- 課題の工夫
- 自己評価ツールの効果的な利用

② 習得型授業の工夫
- 本時の目標や評価基準の明示
- 学習課題や学習過程の明確化
- 「教えて」考えさせる授業づくり

③ 活用型授業の工夫
- 活動的
- 応用的
- 発展的
- プロジェクト的

} な活用型授業

④ 授業改善プランの利用と研究授業でのチャレンジ
- 指導者自身の授業改善の取組の振り返りと次のチャレンジ

(2) 取組内容

ア　研究主題を受けた特徴的な取組

本校は、平成21年度から本事業の指定を受け、指導顧問である大阪教育大学の木原俊行教授の指導助言のもとに、開発実践校として取組を進めている。昨年度の取組を通して、全教員が授業改善プランを作成し、教科ごとに設定した重点テーマに沿った実践を行い、公開授業及び校内研修会で相互に学びあい、次の実践に生かすというR → PDCAサイクルが定着し、「授業力向上」に向けて一定の成果を得た。一方、取組の課題として指導顧問の木原教授からは、せっかく作成した授業改善プランやそれに係る実践報告書などがただ提出しただけに終わってしまい、教員自身が自分の取組を振り返り、次のチャレンジにつなげていく手段として活用しきれていないという御指摘をいただいた。

そこで、2年目となる今年度は、この点を改善し、より「授業力向上」「教師力向上」に資する取組にしていくために、次の三点を重点項目として年間計画を策定した。

① 各自の研究テーマに即した授業改善プランの作成とその形成的評価の工夫
- 共通の重点項目から選択した研究テーマに沿った授業改善プランを作成する。
- 授業評価の観点を整理するために授業チェックシートを作成する。
- 授業チェックシートから選択した重点評価項目に関する取組を週単位で振り返って次週の実践に生かす「実践報告書」を作成する。

② 1学期から公開授業週間を設定し、全員が公開授業を実施
- 教科の枠を超え、研究テーマのジャンルが同じ教員同士で相互に授業を参観し授業評価を行う。(1学期)
- 重点評価項目を明示した様式で公開授業指導案を作成し、授業チェックシートにより評価

項目に沿った授業評価を相互に実施する。（３学期）

・ 全ての教員に研究推進の役割を果たしてもらうために、教科の枠を超えたプロジェクトチームを作り、研究授業の授業担当者への支援と指導助言を行う。（３学期）

③ 校内研修会の持ち方の工夫

・単なる教科内の実践交流会にとどまらず、授業改善についての新しい実践アイディアが提案できるような校内研修会になるよう、参加型協議、教科単位で協議、学年で協議などさまざまな形態を実施する。

・校内研修会の最後に必ず「次なるチャレンジの宣言」を行う。

校内研修における分散会

イ 取組の時系列

4 ～ 5 月	・研究推進にかかる年間計画の提示（職員会議） ・個人研究テーマを具体的な取組①～③より選択して設定し、授業改善プランを作成 ・各学年で家庭学習に関する取組の計画立案 ＜第１回Ｒ→PDCA サイクル：前年度の実態をもとに１学期の授業改善プランを立てる＞
6 月	公開授業週間の設定 ・教員相互で授業参観し、研究テーマに沿った授業評価の実施 第１回校内研修会 ・個人研究テーマと今回の授業での Challenge について分散会形式で研究協議 ・今後の授業改善へのアプローチ（次なる Challenge への決意）宣言
7 月	指導顧問訪問指導 ・公開授業週間及び第１回校内研修会の成果と課題 ・今後の研究推進の方向性の確認（授業づくり及び授業評価の観点の整理と再構築の必要性と校内研修会の効果的な分散会の在り方） 授業評価の観点を整理するため、授業ﾁｪｯｸｼｰﾄ（習得型・活用型）を作成
8 月	第２回校内研修会 ・１学期に作成した授業改善プランの実践報告（Check・Action）と２学期に向けての Challenge 宣言 ・４月に実施したﾍﾞﾈｯｾ総合学力調査の分析 ①教科に関する調査（各学年各教科による分散会形式） ②意識に関する調査（各学年による分散会形式） ＜第２回Ｒ→PDCA サイクル：１学期の実態をもとに２学期の授業改善プランを立てる＞
9 月	・新たに作成した授業ﾁｪｯｸｼｰﾄの共通項目及び習得型又は活用型項目よりいくつかを選択して、２学期の授業改善プラン重点評価項目と個人テーマを設定 ・選択した重点評価項目により授業参観及び研修会分散会のｸﾞﾙｰﾌﾟ分けを決定
10 月	・公開授業までの１ヶ月間、自分の選択した項目について「2 学期の授業改善プラン重点評価項目の実施状況」を各自で記入し、毎週の週案とともに提出して自分の授業実践の振り返りを実施 ・公開授業指導案の作成（授業ﾁｪｯｸｼｰﾄの中から選択した重点評価項目を明示した様式を指定）
11 月	公開授業週間の設定 ・重点評価項目ごとに分けたｸﾞﾙｰﾌﾟのﾒﾝﾊﾞｰで相互に授業参観し、評価項目に沿った授業評価の実施 第３回校内研修会（指導顧問訪問指導） ・授業ﾁｪｯｸｼｰﾄの共通項目への Challenge について全体会で研究協議（課題のある生徒へのアプローチの

	方法と授業規律の確保の方法） ・授業ﾁｪｯｸｼｰﾄの習得型・活用型の重点評価項目別ｸﾞﾙｰﾌﾟによる分散会形式の研究協議
12月	2学期の授業改善プランの実践報告（Check・Action）と3学期に向けてのChallenge宣言 ＜第3回R→PDCAサイクル：2学期の実態をもとに3学期の授業改善プランを立てる＞
1月	・公開授業までの1ヶ月間、自分の選択した項目について「3学期の授業改善プラン重点評価項目の実施状況」を各自で記入し、毎週の週案とともに提出して自分の授業実践の振り返りを実施 ・研究授業指導案の作成（授業者を中心としたﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾁｰﾑによる授業参観および事前研の実施）
2月	第4回校内研修会（指導顧問訪問指導） ・研究授業（数学・英語・家庭科） ・教員は自分のﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾁｰﾑ以外の授業を参観し、授業者のChallegeについて分散会で研究協議

ウ　人材育成にかかわる成果と課題

平成21年度に本事業の指定を受けるまで「教師力向上」「授業力向上」に結びつくような校内研修会がほとんど行われていなかった本校であるが、2年間にわたる研究推進の取組を通じて「年間を通じて授業改善プランに沿った取組を実践しなければならない」という意識を全教員が持つようになったことがまず大きな成果である。学力調査などの分析の方法ひとつ、授業改善プランや実践報告書の書き方ひとつを取ってみても、校内研修会ごとに全教員の分が印刷製本のうえ配布されるので、回を追うごとに内容が充実したものになってきている。また、校内研修会の研究協議は昨年度より一貫して教科の枠を超えたグループ分けによる相互の授業参観をもとに実施しているので、同じ重点評価項目を選択していても教科の特性により異なったアプローチの方法に学ぶべき点が多いのも大きな成果であると言えよう。

エ　人材育成から考える組織の活性化の成果と課題

本校では本事業推進のために昨年度から校務分掌に「研究推進委員会」が設置され、教頭、教務主任、生徒指導主任、進学主任の他、学習連携部として各学年主任、授業研究部として5教科の教科主任を構成メンバーとして、取組の方向性や校内研修会の在り方について意見を交換しながら研究を進めてきた。研究推進委員会のメンバーは校内研修会では分散会の司会者であり、全体会では研究協議のキーパーソンでもある。彼らの積極的な意見交流から若い教員にも意見を出しやすい雰囲気づくりがなされ、教科の枠やキャリアの差を超えた学び合いができるようになりつつある。

また、6月と11月に設定した公開授業週間を軸とした取組では多くの書類を作成する必要があるため、必然的に教科内や学年内での意見交流が増え、授業改善の方策について教員自身がさまざまな方法を模索するようになってきたことも大きな成果である。

研究推進委員会メンバーによる分散会報告

(3) 成果を受けた今後の方向性

まず、今年度作成した授業チェックシートの効果的な活用法をさらに研究実践していくことが必要である。さらに、木原教授から指導助言を受けながら今年度実施できなかった外部機関と連携した公開授業と事後研修会の実施についても検討していきたい。

(4) 本事業に係る取組資料の説明

ア　学力向上へのグランドデザイン　久御山中学校学力向上ビジョン
イ　平成22年度第1学期研究推進個人研究テーマ一覧
ウ　2学期の授業改善プランと実践報告の一例
エ　授業チェックシート（習得型）
オ　2学期の授業改善プラン重点評価項目の実施状況の一例
カ　第3回校内研修会レジメ

2　管理職の視点から考える本事業の成果

（1）　人材育成の考え方の変容

学校教育の活動成果は、その担い手である教師の資質能力に負うところが大である。よって、個々の教師の資質能力（教師力）を如何に向上させていくかは、学校運営において極めて重要な課題であることはいうまでもない。特に本校では、昨年度から「授業力」向上をその柱とし、焦点化した取組をしている。２年目となった本年度では、研究推進体制の整備、研究推進内容の充実、木原教授の指導助言等により、個々の教師の授業改善に対する意識の向上と具体的取組の前進が見られ、一定の成果があった。

本年度は、特に、全員が公開授業当日の指導案や、授業改善のための各自の研究テーマを提示し、実施改善状況を毎週報告することで、自分自身の指導方法について謙虚に振り返ることができた。

（2）　組織の活性化に向けた現状分析から考える自校の特色づくり

ア　教職員の意識

全員による２度の公開授業における指導案作成、その際の相互参観と評価シートにもとづく授業評価、週案に添付して提出する授業改善実施報告等の取組の中で確実に授業改善への意識向上が図られた。

イ　組織のシステムづくり

昨年度発足した研究推進部の位置付けを一層明確化するとともに、定期的な研究推進委員会開催を進めた。その中で推進委員のメンバーの役割分担や、メンバーによる他の教師への日常的な指導助言が行われることで、組織的な取組が一層推進された。また、相互評価や研修会当日の討議も教科の枠を超えた構成で行うことで、様々な視点からのアプローチを学ぶ場となった。

ただし、家庭学習の充実（授業とのリンクの工夫等）については、各学年及び個々の教師に委ねている部分が多く、組織的な対応という面からは、昨年度に引き続き課題である。

ウ　学校経営計画及び学校評価の変容

「教師力向上」教育実践力継承事業の指定の下、計画的に全ての教師が年度当初から具体的実践の発表の場を持ち、相互に学び合い、次の実践を進めるという「Ｒ→ＰＤＣＡサイクル」が定着してきていることは、学校経営上の主要課題である人材育成について、成果があった。

学校評価に関しては、２度の公開授業週間を設定し保護者をはじめ地域の方々に学校公開をする中で保護者、学校評議員、ＰＴＡをはじめ様々な方から随時評価をいただく機会となった。また、現在集計・分析中の学校評価アンケートの項目の中で、保護者の方や生徒から授業に関する評価を受けることで、今後の取組みに生かせるものと考えている。

3　ミドルリーダーの視点から考える本事業の成果

(1) 取組から考える人材育成についての自らの意識の変容

ア　人を動かす

多くの取組からたくさんのことを学んでいくが、みんなで協力して取組を行うためには、はっきりとしたビジョンを提案し、それに向けて的確なプロジェクトを企画・設定することがとても大切であると再認識した。

今後、学校の中心となって物事を進めていく際には、全教職員にしっかりとビジョンを提示し、共に取り組んでいくプロジェクトを企画・設定するという姿勢を持ちたい。

イ　若手教員へ積極的に関わる

受け身である若手教員が多く、ベテラン教員に対して自ら積極的に相談するなど働きかけることが少ないように感じている。そこで、ベテラン教員には及ばないながらも日頃からコミュニケーションをとり、今までの経験や学んだことを積極的に若手に伝えられるようにしていきたい。

(2) 取組から考える自校組織の活性化

ア　研究推進部を中心とした研究の活性化

授業研究の取組が単に公開のための研究授業に向けての取組でなく、個人テーマを意識した日々実践することにより、教師に「授業力」を高める意識の高揚が見られるようになってきている。

イ　授業参観・研究協議の方法の活性化

授業参観シートの活用により、授業参観の視点が明確になった。また、教科は異なるが同じ研究テーマを持った者同士が授業参観や研究協議を行うことで、いろいろな意見交換ができ、充実した討議に繋がった。

(3) 教職員の変容

ア　教師の意識改革

研究推進部長をリーダーとして、教職員全員で取り組んでいこうという共通理解の下で授業改善の取組を行うことができた。

イ　年間を通して研究テーマを意識した日々の授業改善への取組

毎学期末に授業実践の成果と課題の分析をするだけでなく、週案に今週の実践を記録した。その結果、日頃から毎時間の授業を大切にし、自分の研究テーマを意識した授業の実践を積むことができた。

ウ　指導顧問の先生の指導助言による授業改善の意欲向上

研究授業や日々の取組に対して、具体的で大変分かりやすく、かつプラス面を強調した指導助言をいただいた。その結果、授業改善への意欲が高まり、教職員が木原教授の指導助言に熱心に耳を傾け、授業研究を続けていく原動力となった。

学力向上へのグランドデザイン　久御山中学校学力向上ビジョン

教育目標
生涯にわたる学習の基礎を培い、創造性と国際感覚を身に付けた生徒の育成

学力向上に関わる学校経営方針

授業改善の取組と開かれた学校づくり

各種検定試験の活用

耕心

知恵を耕し、心を耕す授業づくり
～確かな学力の充実と向上を目指して～

学力向上のための実施計画

平成21年度

① 学力調査結果を分析し、授業改善プランの作成
② 学年ごとに家庭学習の在り方と評価方法の検討
③ 授業での統一指導項目と授業規律の指導の徹底
④ 生徒の努力目標と評価の基準を明確にし、評価を指導に生かす方法の研究及び実践の展開

平成22年度

① 京都府の学力調査等を総合的に分析
② 実施計画の成果と問題点の明確化

Research（実態把握）→ Plan（計画立案）→ Do（実践）→ Check（点検･評価）→ Action（改善）

学習基盤の確立に向けた具体策

授業研究部

指導内容・方法の工夫

① 授業規律の指導を徹底
② 「分かる授業」の授業展開を工夫(生徒の努力目標・到達目標を明示し全教科で授業統一指導項目を実践)
③ 全ての教科で具体的な基礎学力充実の取組実施

校内の研究や研修の工夫

① 年２回(６月11月)に授業公開週間を設け、全員の研究授業実施
② 学力調査結果を教科ごとに分析し、学期ごとの定期テストの結果を踏まえて、生徒の実態に合わせた授業計画の立案と実践の点検･評価及び改善
③ 言語活動の充実の視点を持った授業展開の工夫

学習･連携支援研究部

教育課程編成上の工夫

① 年間を通じて朝の読書を実施し望ましい読書週間と豊かな人間性の育成
② 新学習指導要領を見据えた教育課程の編成
③ 幼保小中高一貫的教育を見通した教育課程の編成

学習支援の工夫

① 家庭学習の在り方と評価の方法を各学年･教科で工夫し、実施
② 夏休み・冬休みの長期休業中の学習会を実施
③ 外部人材の活用と年間を通じての放課後学習会の実施

地域との連携・協働の工夫

① 小中高連携の推進と充実
② 外部人材の活用
（土曜塾・放課後学習会）
③ 学校運営協議会の設置推進

授業チェックシート（習得型）

	項　　目	C 改善を要する状況	B おおむね満足できる状況	A 十分満足できる状況
1	本時のねらいやめあてが明確になっている	本時のねらいの提示が不明確であったり、授業展開がねらいと一致してない。	本時のねらいが提示され、ねらいに沿った授業展開がされている。	授業展開中に，生徒が本時のねらいを意識するよう，働きかけをおこなっている。
2	学習規律が徹底されている	私語をしていたり、学習に参加していない個々生徒に対する指導援助ができておらず、学習集団に一体感がない。	私語をしたり、学習参加に消極的な生徒に対する指導援助を適宜行い、概ね教師の意図の下に授業が展開されている。	指導者から当該生徒に対するものだけでなく，生徒同士で，積極的に学習参加するよう，注意し合っている。
3	学ぶ意欲を起こさせる魅力的な授業である	生徒が主体的に学習に参加する場面や興味関心を高める発問や教材提示等に乏しい。	導入場面において、生徒が興味関心を持てる教材の提示や展開の工夫が適切に設定されている。	導入のみならず，授業全般に，生徒が興味関心を持てる教材の提示や展開の工夫等がなされている。
4	家庭学習へのアプローチがされている	本時の学習内容と家庭学習の繋がりが示されていない。	本時に習得した内容をもとに、生徒が家庭学習するための課題を提示している。	本時に習得した内容を定着させるための適切な課題と，それらを発展させる課題の両方を、具体的に指示している。
5	ペアワークやグループでの活動など、互いに学び合う時間を確保されている	学びあう時間や場が確保されていない。	学びあう時間や場がある程度確保されている。	学びあう場面において、多くの生徒が積極的に交流している。
6	自己評価ツールなどを用いて、本時の学習内容についての振り返りがなされている	本時の学習内容の振り返りをする時間が確保されていなかったり、評価項目がねらい・内容に沿っていない。	振り返りの時間の確保がなされるとともに、本時の学習内容とねらいに沿った評価項目が設定されている。	個々の振り返りがクラス全体の中で共有される機会や仕組みを伴っている。
A	習得すべき内容（学習過程の全体）が明確にされ、学習に対する見通しが持てる	本時で習得すべき内容が精選されておらず、単元計画の中での本時の位置付けが不明瞭である。	本時で習得すべき内容が精選され、単元計画の中での本時のねらいが明確である。	単元全体を通して，習得すべき内容が整理され明確化されている。
B	本時の自己評価規準・判断基準が明確であり、Bレベル、Aレベルの両方を明示した上で挑戦させている	自己評価規準が生徒の立場から不明瞭であり、基準を明確に提示していない。	自己評価規準を明確に提示している。	自己評価規準と判断基準が適切に設定され、生徒が自分にあったレベルに挑戦している。
C	本時で習得すべき学習内容のポイントが分かりやすく解説されている	学習内容のポイントが不明瞭であったり、解説が不十分である。	学習内容のポイントがきちんと解説されている。	学習内容のポイントが適切であり、またそれを伝えるための方法が工夫されている。
D	習得すべき内容をパターン化し、練習する時間が確保されている	習得すべき内容を練習する時間が確保されていない。	習得すべき内容を練習する時間が確保されている。	習得のための練習時間を、授業展開中に効果的タイミングでを確保している。
E	学習した内容が理解できているかを確認する機会が確保されている	学習した内容が理解できているかを確認する機会が確保されていない。	学習した内容が理解できているかを確認する機会が確保されている。	学習した内容が理解できているかを確認する機会が確保されている上，それをおこなう方法が工夫されている。
F	学習の振り返り、学び直しによる深化と補充の機会が保障されている	学習の振り返り、学び直しによる深化と補充の機会が保障されていない。	学習の振り返り、学び直しによる深化と補充の機会が設定されている。	学習の振り返り、学び直しによる深化と補充の機会を設定し，それぞれの学習方法に工夫が見られる。
	授業全体を通じて参考になった点			
	よりよい授業にするために改善が必要な点			

平成 22 年度　第 3 回校内研修会

2010.11.17

平成 21 年度からの取組の概要

①授業と家庭学習のリンクの工夫
- 学習習慣の充実
- 課題の工夫
- 自己評価ツールの効果的な利用

②習得型授業の工夫
- 本時の目標や評価基準の明示
- 学習課題や学習過程の明確化
- 「教えて」考えさせる授業づくり

③活用型授業の工夫
- 活動的
- 応用的
- 発展的
- プロジェクト的

} な活用型授業

④授業改善プランの利用と研究授業でのチャレンジ
- 指導者自身の授業改善の取組の振り返りと次のチャレンジ

平成 22 年度　現在までの取組

＜ 1 学期＞

まず
- 個人研究テーマを上記①～③より選択して設定
- 各教科での授業改善プランの作成
- 各学年家庭学習の取組計画立案

そして
- 6/9 ～ 6/16 までの公開授業週間に相互に授業参観

さらに
- 6/19 第 1 回校内研修会実施
  個人研究テーマと今回の授業でのﾁｬﾚﾝｼﾞについて分散会形式で研究協議
  今後の授業改善へのアプローチ（次なる Challenge への決意）宣言

＜夏休み＞

全体で
- 1 学期に作成した授業改善プランの実践報告（Check・Action）の記入
- 4 月に実施したﾍﾞﾈｯｾ総合学力調査の分析
  ①教科に関する調査（各学年各教科）
  ②意識に関する調査（各学年）

研究推進委員会で
- 授業評価の観点を整理するため、授業ﾁｪｯｸｼｰﾄ（習得型・活用型）を作成

＜ 2 学期＞

まず
- 授業ﾁｪｯｸｼｰﾄから 2 学期の個人テーマを選択して設定
  （共通項目・習得型または活用型項目よりいくつかを選択）
- 選択した項目により授業参観および研修会分散会のｸﾞﾙｰﾌﾟ分けを決定

そして
- 公開授業までの 1 ヶ月間、自分の選択した項目について「2 学期の授業改善プラン重点評価項目の実施状況」を各自で記入し、毎週の週案とともに自分の実践の振り返りをする
- 11/11 ～ 11/17 までの公開授業週間にｸﾞﾙｰﾌﾟ内で相互に授業参観

さらに
- 11/17 第 3 回校内研修会実施　←本日です！

1．全体会

1 学期からの本校の課題である

課題のある生徒へのアプローチ
授業規律の確保

のヒントを探るために「共通項目」へのﾁｬﾚﾝｼﾞからお互いに学びましょう

＜共通項目＞

1	本時のねらいやめあてが明確になっている	社会・数学・音楽
2	学習規律が徹底されている	体育
3	学ぶ意欲を起こさせる魅力的な授業である	理科・技術
4	家庭学習へのアプローチがされている	10 組
5	ペアワークやグループでの活動など、互いに学び合う時間を確保されている	英語・国語（3 年）
6	自己評価ツールなどを用いて、本時の学習内容についての振り返りがなされている	国語・家庭

不思議なことに、何の打ち合わせもないのに各自が選択した共通項目はほぼ教科ごとに分かれていました。そして 6 つの項目全てを網羅していることも判明しました。
ということは、それぞれの実践から次の Challenge へのｱｲﾃﾞｱが見つかるはずです！

2．分散会（活用型Ａ～習得型Ｅまでのグループ分けによる研究協議）

活用型Ａ	Ｉ	教科書教材の内容を、生活に題材を求めた複雑なものに応用し、考え方に複数のやり方がある発展的な課題として取り組ませている
	Ｋ	生徒が思考の結果を表現する場が確保されている
	Ｌ	思考力の育成の手段や学習の振り返りの手段としてICTを効果的に活用している
習得ＢＣ	Ｄ	習得すべき内容をパターン化し、練習する時間が確保されている
	Ｅ	学習した内容が理解できているかを確認する機会が確保されている
習得Ｄ	Ｂ	本時の自己評価規準・判断基準が明確であり、Ｂレベル、Ａレベルの両方を明示した上で挑戦させている
	Ｃ	本時で習得すべき学習内容のポイントが分かりやすく解説されている
習得Ｅ	Ａ	教材や単元ごとに習得すべき内容（学習過程の全体）が明確にされ、学習に対する見通しが持てる

まず、選択した項目についてどんなチャレンジをしているのか、参観者で気づいたことをたくさん出し合いましょう

「この授業では、こういう工夫をされましたね(^_^)v」
「私もやってみたんですがなかなかうまくいかないんです(>_<)」など

↓

授業者から、この１ヶ月間の取組も含めてチャレンジした内容の種明かしをしてもらいましょう

「そうなんですよ。実はこんな苦労があったんです(*^_^*)」など

↓

選択した項目の教科ごとのアプローチの仕方の工夫とアイデアをお互いに学びましょう

授業研究・事後研修会を終えて

授業改善へのアプローチ（次なるchallengeへの決意）

教科（　　）氏名（

久御山中学校における本事業の成果と課題

木原俊行（大阪教育大学）

1．はじめに

京都府久世郡久御山町立久御山中学校（以下，久御山中学校）は，平成21年度に続き，今年度も，京都府教育委員会による「教師力向上」教育実践力継承事業の対象校として，授業改善や校内研修の企画・運営上の工夫に取り組んだ。

筆者も，昨年度に引き続き，当該事業に協力し，久御山中学校の取り組みに対して，アドバイザー役を果たすこととなった。昨年同様，7月，11月，2月に，同校を訪れ，研究推進チームの協議や授業研究会に参加した。平成21年度もそうであったが，久御山中学校では，授業改善の努力を重ねられて教育実践力の向上が図られたし，それが生徒の学びの充実をもたらした。本小論では，それらの特徴を筆者なりの言葉で解説したい。また，久御山中学校の授業改善とのさらなる発展の針路についても言及してみたい。

2．授業改善の進展

（1）習得型授業の充実

知識・理解や技能の徹底を図るために，教師が指導性を前面に出して教材内容の解説や演示を繰り広げ，子どもがそれをフォローするタイプの授業を「習得型」授業と呼ぶ。その成立要件を筆者は，次のように定めている。

・目標や評価規準，学習過程の明示
・ポイントの分かりやすい解説
・パターン練習
・確認（まとめ）
・振り返りと学び直し

これらの原則を満たした授業を久御山中学校の教師たちは計画し，実施している。例えば，写真1左は，英語科のある教師が本時の目標や学習過程を確認している様子である。黒板に，当該時間の学習活動や家庭学習課題が記してあり，生徒は見通しを持って，本時の目標たる「単語の定着」「過去形の理解」に励むことができる。また写真1右は，当該教師が毎時間の始めに行っているという復習（学び直し）やその内容に関する小テストの様子である。その営みが継続され，定着しているのであろう。教師が簡単に指示するだけで，生徒は，復習をすばやく開始し，またそれに集中していた。

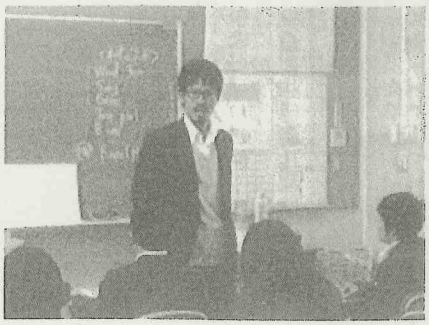
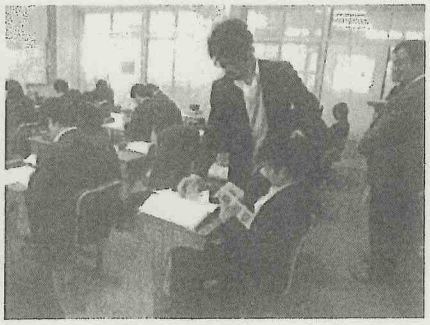

写真1　習得型授業のための取り組み

（2）活用型授業の充実

思考力・判断力・表現力の育成に向けた，活用型授業には多様性がある。筆者は，それを，以下のような４タイプに分類している（木原 2011）。

①活動的

新学習指導要領においてその重要性が主張されている「観察・実験やレポートの作成，論述」などの学習活動を盛り込んだ授業である。学習活動のレパートリーが豊富な授業と言ってもよい。

②応用的

習得した知識等をより複雑な状況に適用する。

③発展的

教科書等を利用して習得した知識を，子どもが自身の生活や社会の今にあてはめてみる。

④プロジェクト的

習得した知識や技能を子どもたちがものづくりやイベントの企画・運営に活かす。

久御山中学校においては，既に平成21年度に，いくつかのタイプの活用型授業が試みられた。例えば，数学科の教師は，基本的な図形の体積の求め方を導入した後，それをより複雑な形の求積に適用させていた。また，理科では，指導者は，教科書を用いて地震に関する基礎的な知識を生徒に付与した後，地震に耐える建物の特徴等について生徒に考察させていた。また，家庭科の授業では，教師が，被服のデザインが人に与える印象を指導した後，生徒に，それを自らのファッションに対して適用させ，被服に関する思考を深めさせていた。

平成22年度，久御山中学校では，活用型授業の実践の蓄積が図られた。例えば，家庭科の教師は，写真２左のように，生徒に和装と洋装のひな型を与えて，彼らに，両者の特徴を比較検討させ，発表させていた。また，社会科のある教師は，写真２右のように，生徒に，京都府のホームページにアクセスさせて，その地域的特色を把握させていた。これらに代表されるが，久御山中学校では，活用型授業の数が増え，またそのレパートリーが豊富になってきた。

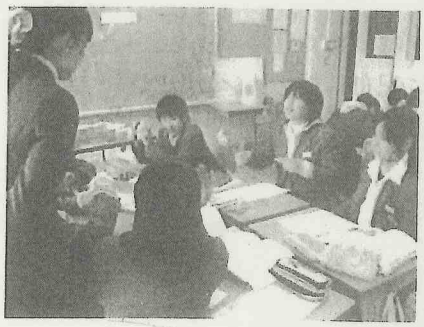
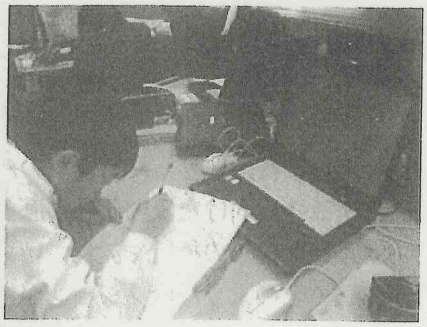

写真２　活用型授業の取り組み

３．授業改善システムの整備

久御山中学校では，平成21年度においても，各教師が学期ごとに授業改善プランを策定し，その実現の程度を授業研究会などで確認していた。平成22年度は，いくつかの仕組みが生まれ，全体として授業改善システムが整備された。

（1）授業チェックシートの開発と活用

まず，「授業チェックシート」の開発である。このシートは，習得型授業と活用型授業に共通する6つの項目と，それぞれに固有の6項目から成る授業評価のための道具である。久御山中学校の教師たちは，もちろん授業公開週間や授業研究会における，同僚間の相互授業評価の場面において，このシートを用いる。同時に，これを授業づくりにも活かす。つまり，授業改善プランを策定する折にも，また研究授業の指導案を作成する際にも，授業チェックシートの項目に対する取り組みが記されているからだ。授業チェックシートの項目が授業改善に関する教師間の「合い言葉」にもなり，また授業設計と授業評価を接続するためのパイプにもなっている。写真3は，3学期の授業研究会において，授業チェックシートの項目に基づいて，研究授業の特徴と課題がしっかりと協議されている様子である。

写真 3　授業チェックシートを用いた授業研究

（2）授業改善プランの実施状況のていねいな点検

次いで，久御山中学校の教師たちは，各学期の授業改善プラン重点評価項目について，その実施状況をていねいに点検している。特に，ある期間においては，共通項目について，また習得・活用型授業用項目に関して，週単位でそのふり返りを進めている。シートにふり返りを記入する労は少なくなかったであろう。しかし，その分，授業改善に関する情報量が増えた。そして，それらの密な情報は，自己点検のためにも，また授業研究会などの意見交換のためにも，有用であった。

4．おわりに

久御山中学校では，管理職や教務主任・研究主任のリーダーシップ，その他のスタッフのフォローワーシップが望ましい形で展開されて，上述したような授業改善やそのためのシステムの整備が進んだ。

特に，研究主任が発揮した実践的リーダーシップは極めて重要であった。それは，例えば，2月18日の研修会において，当該研究主任が，教師たちに配布したプリントの内容・構成に象徴されよう。このプリントでは，まず，平成21年度から平成22年度まで，学校としてどのようなスタンスで，またいかなる活動で授業改善に取り組んできたのかがまとめられている。これを読んで，久御山中学校の教師たちは，授業改善に向けた校内研修の歴史を再認識できた。次いで，プリントには，当日の研究授業に関するグループ協議の趣旨や流れ，留意点が記載されている。それを目にして，同校の教師たちは，協議においてどのようなアクションが期待されているかを再度自覚できた。さらに，プリントには，グループ協議の結果報告，指導講師たる筆者のコメントを記すスペースが設けられている。そして最後には「授業改善へのアプローチ（次なるchallengeへの決意）」を記入する欄が用意されている。こうした内容・構成から，このプリントが，久御山中学校の授業改善に関するポートフォリオとして機能することを願って作られたものであると分かる。こうした手だてをこうじられる力量を実践的リーダーが獲得し，またそれを十全に発揮していることにも，久御山中学校の教育実践力の高まりを確認できよう。

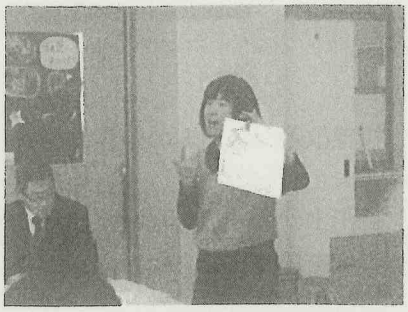

写真 4　授業研究会の進行について説明する研究主任

文献：木原俊行（2011）『活用型学力を育てる授業づくり』ミネルヴァ書房